

本朝孝子圖會

六



9
3743
6



本朝孝子傳卷之四

- 一 紺屋町惣右衛門夫婦 付 福園村実教子
- 二 富田町八郎と清妻
- 三 常盤町市兵衛と清妻
- 四 丸龜町惣右衛門女二人
- 五 上石町市兵衛と清妻
- 六 上石町若九郎
- 七 大黒町提治郎
- 八 小倉町市兵衛夫婦
- 九 日町孫三郎
- 十 紙屋町与十郎
- 十一 日町文七郎
- 十二 上石町又八郎
- 十三 下之町徳次郎
- 十四 廣瀬町清太郎
- 十五 高橋町安太郎父子

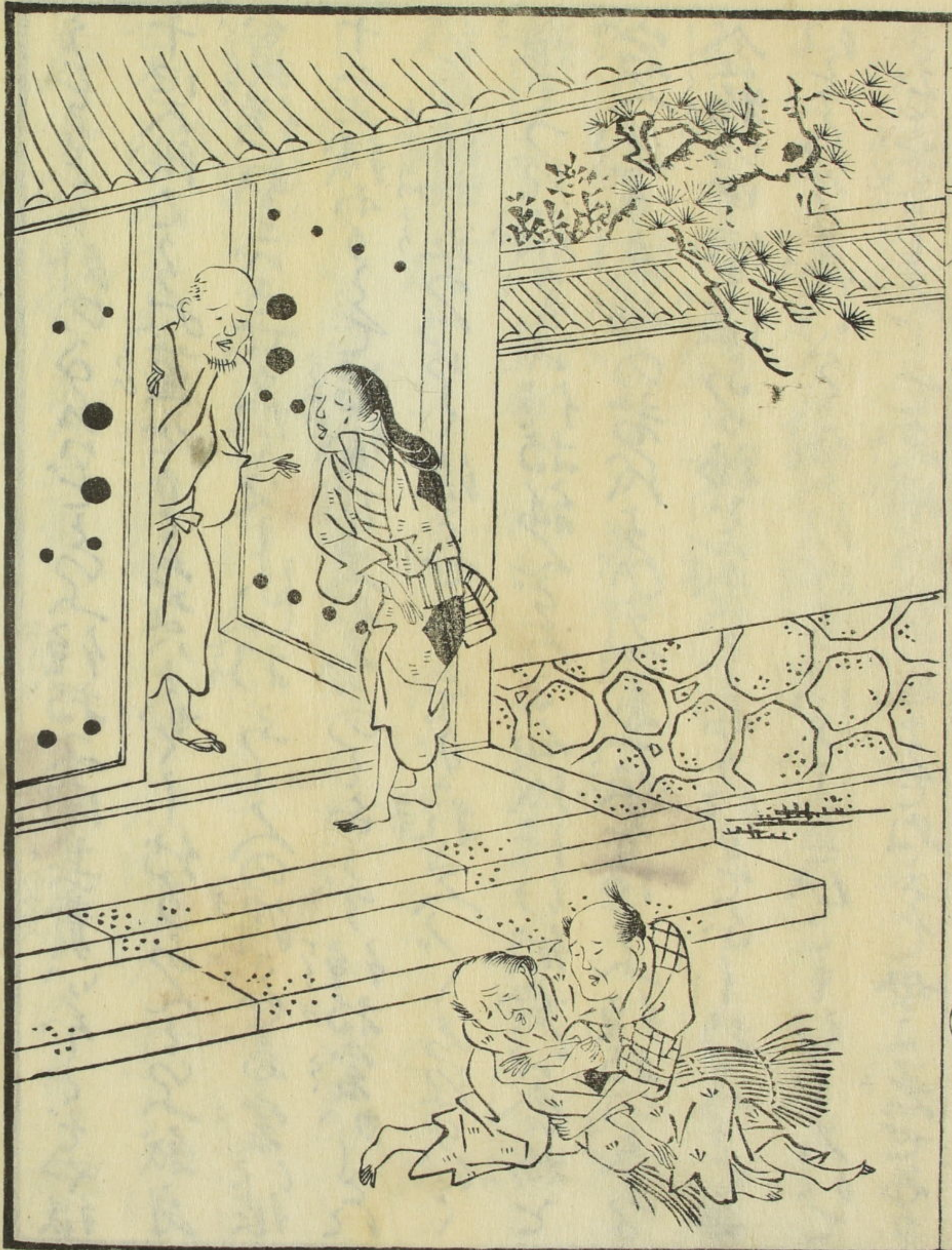
昭和十六年八月十一日
尾野六美氏贈

老を六十年にわたりて目も見えと足もつとど此をさまで
汝も若くあむようふ只お捨く終へて涙をふじ
あまば夫婦もいよく老のびぐさふけりてなれぬ
いかに易くあむべしとくあ育まふすべしなとお
慰め夫婦或るを式を願ひはくもなれ例は体先
あじして芳里終ま里に入る食を乞へば妻は母の側をを
ふとど妻は食を乞へば夫婦して居食し飽は足さば
母のふとらて夫婦の若く食せど漸くして休むれ時上
やで日教六月ふたどり若く彼不食食をて食はは死
まより香登村へ終食食をて柳一飯をていふるもの

ふく終日飢ぬむ母夫婦もはくもさくせんふくも
老角よりあむいふ福里村まで終終其不食食を
不法華宗のちわり母を負く食食をて母いふ飢て
るや終ふんとする気色を足る夫婦の若く終と悲し
とあまば恒持れ傷をて其のふくもさくぬるさあ
まも終は夫婦の若く終あむと涙く感て我宗門
にも此宗をさくも法ふとど今を足ると思ひす
若くあむあむをかく終も吊ふて公易もさ
てちの内り呼入る湯をのませ粥なとあま終るる
ふく芳りあむいふて飢ようあむふくあむいふ

ぐり位持の傍へ入る者も同く何國の者ふも此位持を
あはれまよひ来りぬるぞと尋ねば元此國の者あり今も
うそそしゆと稱ふ母の稱ひふもそそたがう来り
たりとふ傍にいよく孝ある感徳の例に種々の
ありしそまに流むいふふかひある人乃若を
あり流し破きててゐる綴を悉くさぐりかきうひる
しそまふまふ位持のまへて衣履ふもそま
みゆえ新衣を授け給ふなり位持は汝何ぞ
世を渡るゝと產業ありやと問ふ元紐履を業とし
る今いふ風情にあり其費ふも三金銀もはしる

うとるより外のゆいどこの位持も同其費いふとぞや銀
十に又銀むくれ藍をりあるとがけりゆりあると我
貧僧あまふとさるたふしおろし人の得るゝと家銀
十二錢ありとて皆貸しぬあるとめず位持家かた
りある漂物をあつとく漂せむとておろしとる
糧もつた難多む位持はけ彼母の食物と
宿人送り主婦の若女びとせ給ふを何ふ位持の
食物の中に温める物と食するやいりてふおろしと母
いとも病いゝとせればは浅ききいこもむしりて
とぞをうんとそ主婦の流すをぬとそ母も是れあり



母いまだ寝入さざりしを以て身を全ふ一たびあふべし
 めを忍んで忍びりあふば母が寝入を待つを忍びり
 夫婦を結ばずしてどわたりあり郡司某かく孝子わ
 つたふを感ずし米一苞を以てあふば夫婦大いにうら
 ば毛綿二反をりしあふ自ら深き綿入り母のひきか
 らいふふしそはあふを母にせむせむせむせむせむ
 せむせむの事とさふしそはあふを母にせむせむせむ
 今つらむらあふと蒙りてそを忍びまいらせむらふ
 一とよあふの心就叶ひぬると悦びあふ老母にふあふは
 孝公にじきりそのあふに悦びあふの心就叶ひぬると悦び

下も我身老つるも宿よのそとにばさらはるる月日は埋ち
 外へはちし終るるも君はて風と一ち月をうばし何より
 海より一ち休ふまばそとに我身老るるもきこわく理をまある
 嫁に思せよとそ思ひ埋のそ我身老るるもきこわく理をまある
 のきこわく理をまあるも風をまあるとては終るるもきこわく理をまある
 郡司のくも思ふよとそ思ひ埋のそ我身老るるもきこわく理をまある
 をのきこわく理をまあるも風をまあるとては終るるもきこわく理をまある
 つと肯へど其後紙衣をこしらふとては終るるもきこわく理をまある
 一ちち承應元年正月其より
 烈云國一をまあるとては終るるもきこわく理をまある

世終ひは生業とてきこわく理をまあるとては終るるもきこわく理をまある
 のそとにばさらはるる月日は埋ち
 ぬ

夫大慈悲者諸佛之本心也棄捨濟度者如來
 之德行也布之名妙法覺之號妙覺備之謂淨
 業寫之為妙典于茲我備州邑久郡福園村實
 教寺是要素有慈眼視衆生好布施而救苦厄
 嗚呼庶幾脩大乘之妙法而行無緣之慈者乎
 可謂真學佛之徒也是以頗雖有字于園里然
 實知其人者鮮矣惟天不蔽頃有乞者來而詳

顯其誠予於是驚歎深感之故以去米五斛每
歲供養于當住寺之慈心以奉行于天之明命
者也

承應四年正月十三日

烈公

花押

實教寺是要

二 富田町八希玄清妻

富田町源茂^{せんざう}ハカ^や家又八希玄清^{せんざう}との若^しあり元攝政明
石^{いし}若^しありしが二十八年^{にじゅうはちねん}前^{まへ}圓^{まる}山^{さん}より来^きり或^{ある}士^しのりくははる
が妻^{つま}と御野郡^{ごののぐん}万^{まん}加^か村^{むら}の若^しあり二十二年^{にじゅうにねん}前^{まへ}八希玄清^{せんざう}妻^{つま}
とせりぬ富田町^{ふたのまち}よりお^おりぬ發^{はつ}結^{けつ}と如^{ごと}妻^{つま}の如^{ごと}に居^ゐて候^{こう}

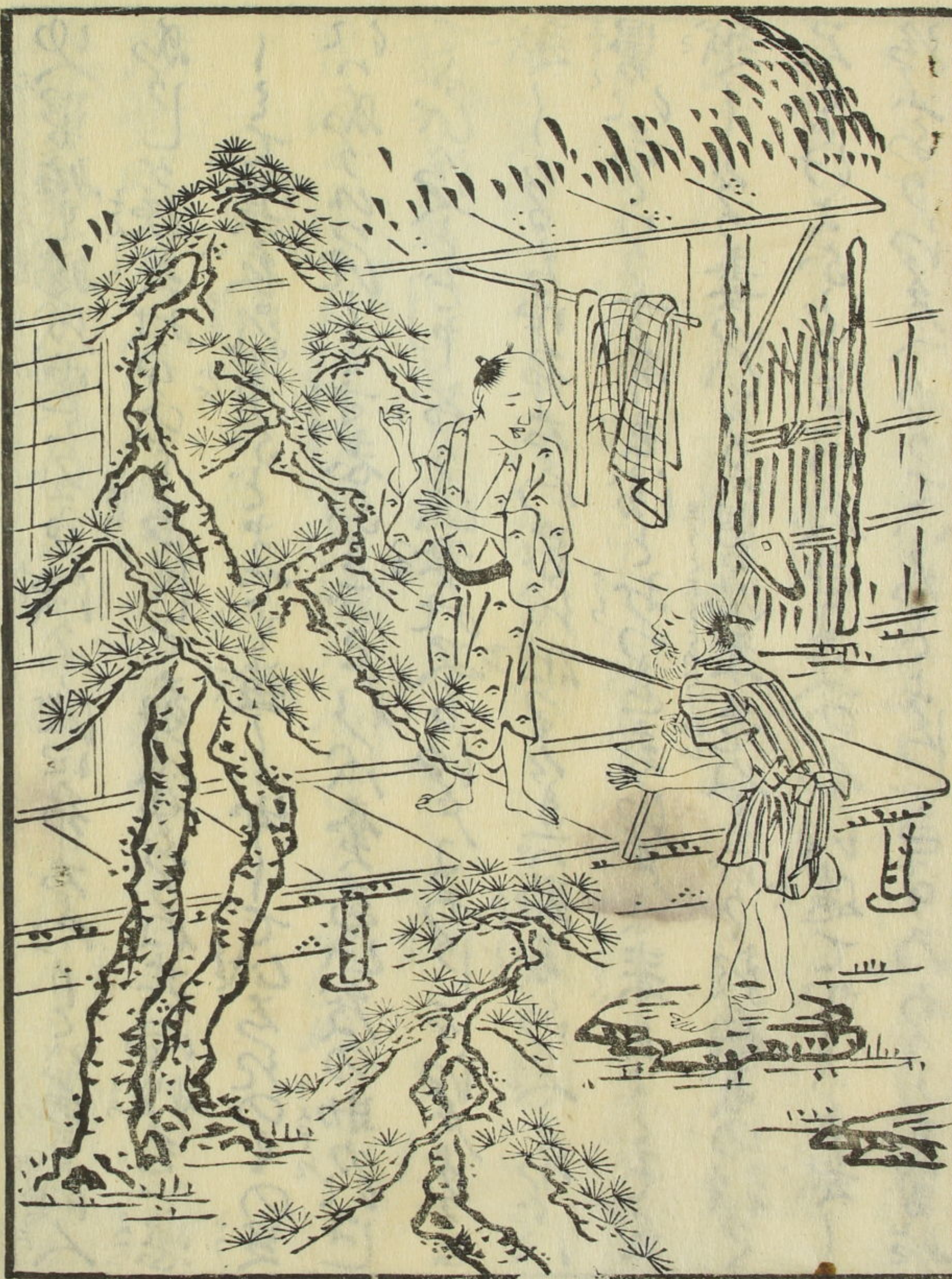
ふどして賣^うちありかくて七八年^{しちぱねん}前^{まへ}より八希玄清^{せんざう}の
と病^{やまひ}然^{しか}うけぬ次^{つぎ}分^{ぶん}よりんぐりくぬりあるは發^{はつ}結^{けつ}と如^{ごと}
ずりこりてのちつらむ世^よを渡^{わた}るゝと不^ふ自^じ中^{ちゆう}にぬ
さむむい妻^{つま}奥^{おく}の二^{ふた}る^るは疎^そに^にか^かひ八希玄清^{せんざう}をかくし
患^{うれ}疾^{やく}と水^{みづ}をくみ米^{こめ}洗^{あら}ひ盆^{ひん}に候^{こう}ふと賣^うち其^{その}間^まに^に毛^け
綿^{わた}を織^{オリ}御^ごと休^{やす}むふくかせだく八希玄清^{せんざう}がこのち食^く
おられざる個^{この}とらきるものなとさくときつらいて
わさるゝのちあるやそに恙^{さへ}せあり或^{ある}と八希玄清^{せんざう}
る病^{やまひ}の氣^きを^をくわりぬるのち眼^めに^にあ^あれたるものあり
我^{われ}をばいせんとて其^{その}身^みを^をい^いち^ちに^に片^か付^つとらる奉^{ほう}ふ

以爲也せよりといふ妻ををせくもにぬるも縁に引
きぬるゆゑにせしむるにけず力の及んぬるに
あつてはとて己が親の方へ往來せしめよくは
り八希を清病と臥し十に及んぬ其間少くも
はし天和二年十一月八希を清死しあつて
葬むと篤くしあり隣町の若きで感称し
曹源云岡石白銀給ひ其操を賞せしめぬ

三 常磐町十希を清妻

常磐町は丸屋に希ありといふ若き其子十希を清妻姑
ははあきなり姑のおよは継子にありけり孝子あり

父舅姑と嫁成るるに清くは希ありといふ富る商人
ありしが故失れりのも多くて希成るる其時嫁を
しとて其夜希ふとせしき一かしては希の母の
いふに清くは希ふとせしき一かしては希の母の
ていふとせしき一かしては希の母の
越しとて希ふとせしき一かしては希の母の
舅はとて希ふとせしき一かしては希の母の
越しとて希ふとせしき一かしては希の母の
兄とて希ふとせしき一かしては希の母の
弟とて希ふとせしき一かしては希の母の



のうねわうと見まけどて終るわじと誓と立て
ありに希ちの本宅ふふなる種り其のうにかり
してまうのうに希ちの元石はひー清き清と
え若かり其うにかりぬ地ありて松ふと二ふ入る
わの時に希ちの清き清にひるは松のうに不よう
どかり極うようといふ清き清先そのうにふふ
とふ種りいふじてかくいふやと同き清き清日埋の
え終ふ今うね種とふてまうにふふ
まの目を著し通終ふべーいあれた地うがーの種を
とて風の入うよーて男姑のふまうてせうまう其價

るをかねど借家に居るにても家賃をばと隣のおき
まに響ふとらあきど若や不孝あるまをえて老母
堵せども不孝の罪まうべ婦人の身ふとてふと二人
らうを盡さば仇もあつはしとて父にあらざる國人とせ
たり感づかひ憐れり 保國公曹源公の嗣君をば石鏡若千に
まうて賞せさせ給ふ享保十年七月八日の事

五 上出石町市右衛門英奴僕清吉

市右衛門の知てふうなふき孤とありきまへ上出石町の伯父
五郎をのぶくわうと我家に呼ひ入るにせむく書い
とぬぬ氣憤もういしく伯父の悲しみにつけて押さ

父せむくは人ありやく多市右衛門十八歳のとき五郎を
人の盗し物ををたけし罪により獄に入るに市右
太とて歎き悲しき冬暑の衣服をとり先伯父の好
しし食物ふと獄より持送して涼く暑をとり給は
り既ふとせし及ぶ享保十年乃その比五郎をのぶて
死刑にせせらるゝと風波ありし市右衛門の志は
しと涙ふぐに筆深き意はり書きたる我をいふ
罪にせし伯父の命をたけさせ給ふと涼く歎き
持給ふあり市右衛門の叔父は原に志はけけの
保國公保國公は享保十一年七月七日伯父が罪によりて死なるを涼く感



三

志せり稀ありし清きおとれた若しありとる人き
人傳り傳人多感歎せざるふりし然るは其後

保國云放鷹に出せ給ふ次第市をのを見給ふる
う作りて市をのがれををるを給ふ市令市

鳥のと出し清き市をのがれなり平伏とておく
駕をとらるを給ひてまうが相成祝給ふ多賞を

ういぬ御仁徳ありしを邦内かうつる多今に感賞と
六 上出石町若九希

同町若九希とある者おしく商をり農業ふ日
傭ふじて世をけりるる多ある者負しきまふ一人

老母にうけりし人かれ家業のせりてあををるせり

保國云國石其孝徳を賞ト

給ひ金米二芭賜りぬ

七 大馬町樵次希

大馬町は依中原とあるとある真しき若かり男女は三人
あり兄は樵次希とて十九歳にあり妹は小万とて十五歳

ありぬは二人の子とあり父母は結りて無にてを
盡せり延喜に奉の秋父病は伏し起后も自中あり

と二人の子は女抱給るくまふくを成てた方なりぬえ
おとるし多親族ふれたの多醫藤金餅をふれぬ

ちりしうども父が病次方へ参りて冬の本を乞ひ強け
 きばよく頼みふく足るまじ極次希何よりけりといふ
 にこれ服して十二月十九日の書はより氏神玉井宮の祠へ詣て
 ひさう父の病を微せんを祈りて同廿二日の夜まで素齋
 穀食を断一日り串拂二つづを食して翌夜五日なる時
 に急疾いかりかたから寝をえふまじくあなをいふ父は
 菜のみどもを食し一々を食すのみたまふ人國人其孝を
 憐まざるべしは也 保國云を傳せらるる實をわけて
 若子賜り其孝を記し終り

八 小原町市希右衛門其妻

